

新説 でいだら ぼっち



柏の昔話「でいだらぼっち」は二編聞き書きされ、教育委員会がまとめた。巨人―大男の足跡をめぐる話だが、なぜ大男になったかを、左の文章のように考える「新説」がある。昔話は夢の世界、その新説も楽しい。

むかし、柏の北、布施村のお寺に学問の大好きな若い法師がすんでいました。法師はたくさんさんの書物を次々に読み修めていったそうです。ところが、いつの頃からか法師が一卷の書を読み修めると法師の背丈がぐぐつと一尺伸びていきました。そしてついには一万巻を修めた時、法師は大男になってしまいました。

若い法師、一卷読むごとに背が伸びて大男になったそう。

柏の昔話のうち、七編は紙芝居になっていて、逆井中学校区にある四つの小学校に配布されており、毎月第三水曜日には、ほのぼのプラザですべて公開されている。紙芝居にしたのは、「十色咲かそう会」(事務局・逆井中学校内・代表武井征子)で、脚色し、会員が絵を描いている。「でいだらぼっち」の絵は大山小夜子さん。その冒頭に、でいだらぼっちが普通の学僧とし、一卷の書を履修するたびに身長が伸びるというユニークな発想となっている。

柳田國男が詳説する「ダイダラ坊の足跡」の坊は子どもではなく、すでに大男である。全国の伝説・民話が綴られており、「之を単なる不思議と驚いてしまはずに、今すこししみりと考へて見たい」と思っている」とし、「其一方は夙に当初の信仰と手を分ち、単なる古英雄説話の形を以て、諸国の移住地に農民の伴侶として入り来たり、彼等の樺火(ほだび)の側に於て、兒女と共に成長した」。「十色咲かそう会」は、地域と共にある学校づくりを支援するボランティア・グループである。樺火の傍に温まることなく活動を続けている。そこから飛び出した新説にも納得がいく。本を読もう、読書の大切さを説き、一冊ごとに視界が開け、世界が見えてくることを暗示しているのだろう。

紙芝居をする
大山小夜子さん

